

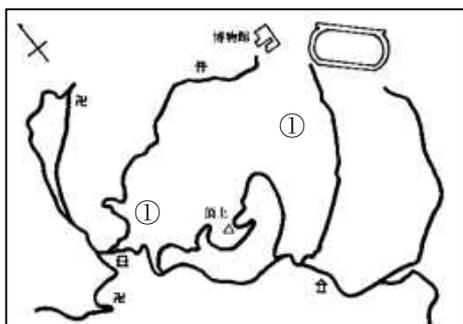
先入観

1. カワセミ(地図中①地点)

「空を飛ぶ宝石」といわれるカワセミですが、鳴き声は馴染みがないと思います。川で見つけたカワセミが飛んで逃げる時に出す声を覚えておいてほしいのです。か細く高音のチーあるいはツイーをという一声ですが、これを打吹山で聞くことがあるのです。春先の長谷の展望台周辺や相撲場のあたりです。何かが飛び、声が聞こえたということがほとんどです。



山の中になぜカワセミがいるのでしょうか。理由は露出した土の崖を探しているからです。カワセミは鉛直の土壁に深いトンネルを作って巣とします。へビの侵入を防ぐため上端から1 mくらい下、下端からは2~3 m以上の位置を選びます。巣穴に入るときは、空中から直接飛び込みます。川の近くに限らず適地を探しているのです。山中の土取り場がよく選ばれます。長谷の展望台下には、遊歩道工事に伴って斜面が切り取られ、土がむき出しの法面ができました。相撲場上の駐車場横の斜面は高さ10mくらい土砂が崩壊しました。土の露出したこのどちらにもカワセミは巣を作ったのですが、現在は樹木が前面に成長し利用しません。



打吹公園のカワセミ

打吹公園の池でもカワセミが見られるのは、餌の魚やエビを狙って来ているからです。このことは川に魚が少ない状況を反映している模様です。

2. ミヤマカタバミ

カタバミは日当たりの良い場所ならどこにでも生育し、取り除くことの難しい草です。葉が家紋にも使われているほど馴染みがある草ですが、ミヤマカタバミは谷間の樹下で日当たりの悪い場所が生育地という反対の性質を持っています。弱い光でも生育できるように葉は大きく、花も大きくなっています。花色は、カタバミが黄色であるのに対し白色であることは薄暗いところ



木地山の個体



でも目立つためと考えたくなりますが、春の白い花弁を持つ花は種子が実りません。花が終われば、花弁を持たず開花することのない閉鎖花を次々とつけ、カタバミ同様に莢が弾けて種子を飛ばします。スマレと同じように閉鎖花が繁殖の主役です。花色は繁殖とは関係ないのでしょうか。三朝町木地山の谷ではピンクの花弁を持つ群落があります。

ミヤマという名は、深山の生育を思わせますが、打吹山のような低山地に普通に見られます。陰湿地からイメージされたのでしょうか。カタバミのように茎を分けることなく、根元の太い根茎に葉をつけます。葉をかじると酸っぱく、カタバミと同様にシュウ酸(oxalic acid)を含んでいることがわかります。カタバミの仲間には園芸店ではオキザリスという名称で販売されていますが、学名につけられている *Oxalis* はこのシュウ酸からきているのです。